

《第 51 回滋賀県芸術文化祭・びわ湖大津 秋の音楽祭参加》
ショパン&シューマン・ピアノ作品全曲演奏シリーズ完結記念



椿 佳美

ピアノ名曲コンサート(7)

2021年10月31日(日) 午後2時開演 滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール小ホール

協力:しがぎん経済文化センター、エラート音楽事務所

後援:公益社団法人日本演奏連盟、滋賀県、滋賀県教育委員会、大津市、大津市教育委員会
京都音楽家クラブ、東京藝術大学音楽学部同声会大阪支部



ポーランド・ワルシャワ音楽院そしてフランス・パリ・エコールノルマル音楽院と、ワルシャワからパリへ、まさにピアノの詩人ショパンがたどった同じ道筋で留学し、ショパンが生きた土地の空気を吸い、研鑽を積んだ滋賀ゆかりのピアニスト椿佳美。

2010年から4年間全8回にわたりショパンのピアノ作品全曲演奏、2014年から4年間全8回にわたりシューマンのピアノ作品全曲演奏を達成。その記念にスタートしたピアノ名曲コンサート・シリーズ。

ピアノ音楽の全盛の時代といわれるロマン派の時代を中心に、ピアノ作品の名曲を次々と紹介。新型コロナ禍の中ではありますが、しっかり練習を重ね、10月31日(日)披露することができました。

プログラム前半は、

ラフマニノフ：幻想的小品集より 「エレジー（悲歌）」 変ホ短調 作品 3-1

Sergei Rakhmaninov : Morceaux de Fantaisie, "Elégie" op.3-1

ラフマニノフ：楽興の時 第1番 変ロ短調 作品 16-1

Sergei Rakhmaninov : Moments musicaux, Andantino op.16-1

リスト：バラード 第2番 ロ短調

Franz Liszt: Ballade No.2 S.171 R.16

リスト：「リゴレット」による演奏会用パラフレーズ

Franz Liszt: Rigoletto (paraphrase de concert) S.434 R.267

リスト：パガニーニによる大練習曲より 第3番 嬰ト短調 「ラ・カンパネラ（鐘）」

Franz Liszt: Grandes études de Paganini "La Campanella" S.140

リスト：巡礼の年 第2年 イタリア より 「ペトラルカのソネット 第104番」

Franz Liszt: Tre sonetti di Petrarca No.104 (Années de Pèlerinage, Italie)

リスト：スペイン狂詩曲

Franz Liszt: Rhapsodie espagnole (Folies d'Espagne et jota aragonesa) S.254 R.90



— 休 憩 intermission —

休憩を挟んで後半は

《オール・ショパン・プログラム》

《All Chopin Program》

ショパン：ノクターン 嬰ハ短調 遺作

Frédéric Chopin: Nocturne (Lento con gran espressione)

ショパン：幻想曲 ヘ短調 作品 49

Frédéric Chopin: Fantaisie op.49

ショパン：練習曲 第3番 ホ短調 作品 10-3 「別れの曲」

Frédéric Chopin :12 Etudes "Chanson de l'adieu" op.10-3

ショパン：ポロネーズ 第6番 変イ長調 作品 53 「英雄」

Frédéric Chopin: Polonaise No.6 "Héroïque" op.53

ショパン：ソナタ 第3番 ロ短調 作品 58

Frédéric Chopin: Sonate pour piano No.3 op.58

ご来場いただいた皆さまに、お礼の言葉と《アンコール》2曲で感謝の気持ちをお伝えしました。

ショパン：ワルツ 第2番 変イ長調 作品 34-1

Frédéric Chopin: Valse No.2 As-dur op.34-1

リスト＝シューベルト：アヴェ・マリア

Franz Liszt = Franz Schubert: Ave Maria



ご来場誠にありがとうございました。

次回予定

椿佳美ピアノ名曲コンサート(8)

2022年5月22日(日) 開演:午後2時

滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール小ホール

《プログラム・ノート》

●ラフマニノフ: 幻想的小品集より「エレジー(悲歌)」 変ホ短調 作品 3-1

ラフマニノフが二十歳前に書き上げたピアノ独奏曲で、全 5 曲から独奏曲集の第 1 曲として収められている。曲集の中でも最も悲哀に満ちて瞑想的な曲調の作品で、哀愁を漂わせゆっくりと演奏される。モスクワ音楽院で和声を学んだ師アントン・アレンスキーに献呈された。

●ラフマニノフ: 楽興の時 第 1 番 変ロ短調 作品 16-1

1896 年に作曲された 6 曲から成る作品集。作曲家でありながら 20 世紀最高のピアニストとしても活躍したラフマニノフらしく、演奏には極めて高度な技巧を必要とする。冒頭から底知れぬ儚げな悲しみを湛え、ロシアの荒涼とした大地を覆う刹那の集積と仄暗く美しい情景に彩られている。題名からはシューベルトの前例を連想させるが、超絶技巧の要求やピアノの書法には、ショパンやリストの影響が見受けられる。

●リスト: バラード 第 2 番 ロ短調

リストはピアノ独奏のバラードを 2 曲書いているが、特に何かの物語について音楽にしたわけではなく、詩的で劇的な叙情を盛り込んだ作品としている。圧倒的に演奏される機会の多いのは第 2 番で、ロ短調ソナタが完成された 1853 年に書かれた充実した作品となっている。リストの音楽は、天使と悪魔、あるいは天国と地獄が 1 つの曲中で描写されることが多く、この作品もその典型で、両極端のコントラストが描かれている。大きく息の長い男性的な旋律と優美で可憐な女性的な旋律が対照的に現れ、半音階やオクターヴなどの様々な技巧に混じって、幻想的で激しく劇的に広がっていく。

●リスト: 「リゴレット」による演奏会用パラフレーズ

「リゴレット」は 1851 年にローマで初演されたヴェルディのオペラ。リストはモーツァルトからワーグナーにいたるまでのオペラの部分(主にアリア)をピアノ演奏用に編曲している。この曲は華麗な曲調からか、演奏の機会が多く、数あるオペラ編曲ものの中でも最も有名な作品である。

●リスト: パガニーニによる大練習曲より 第 3 番 嬰ト短調 「ラ・カンパネラ(鐘)」

リストが作曲した 6 曲からなるピアノ曲「パガニーニによる大練習曲」の第 3 番。パガニーニのヴァイオリン協奏曲第 2 番の第三楽章「ラ・カンパネラ」(鐘のロンド)を主題としている。「カンパネラ(Campanella)」はイタリア語で「鐘」の意味。イタリアの作曲家で、稀代の名ヴァイオリニストであったパガニーニ(1782-1840)は、あまりにも凄まじい演奏技巧を持っていたため、人々に「あれは悪魔に魂を売って手に入れたに違いない」と噂されるほどで、数多くの作曲家に多大な影響を与えている。

●リスト: 巡礼の年 第 2 年 イタリア より 「ペトルルカのソネット 第 104 番」

リストは、マリー・ダグー伯爵夫人とのイタリア滞在中に、初めて接したルネサンスの古い絵画や詩、文学など様々な芸術作品に目を向け、創作の枠を抜け「巡礼の年第 2 年 イタリア」として結実させた。ラファエロの絵、ミケランジェロの彫刻、サルヴァトーレ・ローザの詩、ダンテの『神曲』、そしてペトルルカのソネットなどである。

ソネットは 13 世紀初め頃からはじまったイタリアの古い詩の形式で、決まって 14 行で書かれるため日本では 14 行詩とも訳される。ペトルルカ(Francesco Petrarca 1304-74)はアーレッツォ生まれのイタリアの詩人で、はじめは位の低い聖職者だったが、教会で出会った美女ラウラを忘れることができず、その愛慕の情と愛の苦悩の詩を書きあげ、俗語詩集『カンツォニエーレ』に収めている。詩の要約は下記のとおりで、恋に落ちた喜びと苦しみをドラマティックに歌いあげている。

ソネット 第 104 番 「私には平和もないが、戦う時もある。愛の神は私を殺しはしないが、足かせを外してくれない。

私は生きることも死ぬことも、同じように苦しい。それはすべてが彼女のせいである。」

●リスト: スペイン狂詩曲

1863 年にローマで、1844-45 年当時のスペイン-ポルトガル演奏旅行を思い出し作曲された。スペインの旋律“フォーリア”と“ホタ・アラゴネーザ”を主題にして作られ、ドラマティックな冒頭から、疾走感を伴う部分への移行など、情熱的かつ華麗な作品となっている。ハンガリー狂詩曲の第 1 番から第 15 番までと一緒に出版された。

●ショパン:ノクターン 遺作 嬰ハ短調 「レント・コン・グラン・エスプレッシオーネ」

ショパンのノクターンの中でも大変有名な曲。「遅く、とても情感豊かに(レント・コン・グラン・エスプレッシオーネ)」という楽想指示がそのまま通称名として使われている。作曲した当時、ショパンには、コンスタンツィア・グラドコフスカという片想いの女性がいたが、この作品にもそのような一途な片想いに悩み苦しむショパンの姿が影を落としている。その恋慕の情、憧憬は、代表作・ピアノ協奏曲第2番の創作の大きな動機ともなっており、この作品にも、同様の音型などが引用されている。姉のルドヴィカ・ショパンに献呈されており、初版には「姉のルドヴィカが私のピアノ協奏曲第2番の練習前に弾くために」と書かれている。

●ショパン:幻想曲 ヘ短調 作品49

ショパン円熟期の傑作とされ、「ショパンの天才がその発展の最高段階に到達したときであり、情勢が可能な限りにおいて、あらゆる威力を持って輝きわたったときだった」とニークスは述べている。曲の形態はバラードにきわめて類似しているが、バラードのように古い昔の伝説やロマンスではなく、ショパン自身の現実生活のはなはだ重大事件を物語っているような強烈な印象を受ける。それはスケルツォのような作曲者自身の個人的な表現や、ポロネーズのようなポーランドへの郷土的感情とは違って、さらにスケールの大きな一般的な感情を表現している。さらにニークスはその様子を「音楽は、心臓の中まで激した人間の抑制しがたい吐露のように、はかり知れぬ愛情と憧憬に充満して、われわれの耳に伝わってくる。曲中でだれが作曲家の虚弱さと病身とをうかがうことができようか。それは荒れ狂っている『巨人タイタン』を暗示しているのではあるまいか」と語っている。構成はソナタ風の形式をとってはいるが、より自由なもので、後にこの曲の手法にポロネーズのリズムを融合した「幻想ポロネーズ」が生まれる。

●ショパン:練習曲 第3番 ホ長調 作品10-3 「別れの曲」

1829年にピアノ協奏曲を作曲しようとしたショパンは、自身の技巧的、音楽的な問題点の克服と可能性を広げるために練習曲を作ることを思いついた。ショパンの27曲ある練習曲は、技巧的に高度でありながらも、単なる技巧の羅列ではなく、旋律の美しさ、和声の素晴らしさ、巧みな対位法、ペダリング、カンタービレの重視などにより、音楽が技巧と不可分に結びついている。作品10の12曲の練習曲はリストに献呈され、その中に冒頭の旋律であまりにも有名な第3番「別れの曲」がある。

●ショパン:ポロネーズ 第6番 変イ長調 作品53 「英雄」

ショパンのポロネーズの中でも最高傑作とされる。この曲が作曲された1842年前後の時期には、他にバラード第4番やスケルツォ第4番、その他に作品50の3つのマズルカやノクターン第13番、即興曲第3番などの名曲が次々に生み出され、ショパンの創作の絶頂期といわれている。ショパンは金銭的に不自由を感じることなく、ノアン館というジョルジュ・サンドの別荘で彼女の庇護の下、作曲のみに専念することができた。序奏はやや長めで、荘厳な和音と4度の連続というセットが4回繰り返された後、左手の速いオクターブ上昇などで技巧的なパッセージ処理がなされ、ようやく有名な第一主題に突入する。ショパンはポーランドを祖国に持ったことを誇りに思っており、その誇り高き民族精神が、威厳を持って高らかに歌われている。この作品こそ、祖国ポーランドを賛美する謳歌だと思われる。

●ショパン:ソナタ 第3番 ロ短調 作品58

第2番の葬送行進曲付ソナタより5年後の1844年に作られている。この年のショパンは健康がすぐれず、春には父ニコライが他界したこともあり虚脱状態であった。しかし、姉ルドヴィカとの14年ぶりの再会がショパンに生氣を取り戻させ、この名作を完成させた。確固たるソナタ形式の第一楽章から見事な循環形式で主題操作が行われる。本来の“スケルツォ”らしい第二楽章、夢のように美しい第三楽章、激情するロンドの第四楽章と、ロマン派のピアノ・ソナタの名作中の名作となっている。

第一楽章 アレグロ・マエストーソ

第二楽章 スケルツォ モルト・ヴィヴァーチェ

第三楽章 ラルゴ

第四楽章 フィナーレ プレスト・マ・ノン・タント